

IV 特別寄稿

幼稚園における「社会に開かれた教育課程」を考える

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部子どもケア学科 教授
津金 美智子

平成 28 年 12 月 21 日、中央教育審議会より、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）が出された。平成 26 年 11 月、文部科学大臣が中央教育審議会に諮問したことへの答えであり、次期学習指導要領等の告示内容の方向性を示している。本稿では、答申の中でキーワードとなっている「社会に開かれた教育課程」について述べるとともに、幼稚園教育においてはどのように捉えるとよいのか考えたい。

●「社会に開かれた教育課程」とは

新しい学習指導要領等においては、子供たちが変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力とは何かを明確にし、現実の社会との関わりの中で子供たち一人一人の豊かな学びを実現していくことが求められている。学校が社会や地域とのつながりを意識し社会の中の学校であるためには、学校教育の中核でもある教育課程も社会とのつながりを大切にする必要がある。つまり「社会に開かれた教育課程」とすることが求められているのである。答申では、その「社会に開かれた教育課程」として重視すべきことを次のように示している。

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

こうした「社会に開かれた教育課程」とするためには、各学校においては、家庭・地域と子供たちにどのような資質・能力を育むかという目標を共有し、学校内外の多様な教育活動がその目標の実現の観点からどのような役割を果たせるのかという視点を持つ必要がある。そのため、園長・校長がリーダーシップを発揮し、地域と対話し、地域で育まれた文化や子供たちの姿を捉えながら、地域とともにある学校として何を大事にしていくべきかという視点を定め、学校教育目標や育成を目指す資質・能力、学校のグランドデザイン等として学校の特色を示し、教職員や家庭・地域の意識や取組の方向性を共有していくことが重要である。

これまで学校は、教育活動の計画や実施の場面で、家庭や地域の人々の積極的な協力を得てきたが、今後、一層家庭や地域の人々と目標やビジョンを共有し、家庭生活や

社会環境の変化によって家庭の教育機能の低下も指摘される中、家庭の役割や責任を明確にしつつ具体的な連携を強化するとともに、地域と連携・協働して地域と一体となって子供たちを育む、地域とともにある学校への転換を図ることが必要である。学校、家庭、地域社会がそれぞれ本来の教育機能を発揮し、全体としてバランスのとれた教育が行われることが重要である。

●幼稚園における「社会に開かれた教育課程」とは

子供の幼稚園での生活は家庭や地域での生活から連続しているものであることから、幼稚園教育においては、これまでも家庭や地域との連携を図りながら教育課程を編成することを基本としてきた。

そのため、幼稚園の教育目標や教育方針等について保護者の理解が得られるように、教育内容やその成果等を伝え、納得の上で協力を得ることが重要である。

しかしながら、幼稚園教育が「環境を通して行うこと」を基本としていること、遊びを通して総合的に指導することを重視していることなどは、保護者や地域の人々にとっては、教科書等を使って学ぶ小学校以降の教育と違って見えにくく、遊びの意義や教育内容について、また幼児期に育つことや学ぶことが分かりにくい状況がある。筆者が園長をしていた時、教員と協働して幼児の遊びの意味やその中での学びについて、エピソードや写真等でタイムリーに発信し、今まで以上に保護者の理解を得ていると感じていた。しかし、学校評価の保護者アンケートからは思う程の結果は得られず、そのギャップを反省したものである。そこで感じたことは、教員の発信したいことと保護者の聞きたいこととの差である。いくら発信しても保護者のニーズに合わなければ伝わらない。もちろん、幼児期に大事にすべきことは確実に伝える必要はあるが、それでも保護者の思いに寄り添うことは必要であろう。今後、「社会に開かれた教育課程」とするためには、これまで以上に分かり易い教育課程の編成やその発信の工夫が求められる。その発信の過程では教職員の資質の高まりが求められることとなるが、そのことがさらなる幼稚園教育の質の向上を図るだけでなく、地域と連携した家庭教育をも充実することにつながると思う。

答申の中では、「今は正に、社会からの学校教育への期待と学校教育が長年目指してきたものが一致し、これからの時代を生きていくために必要な力とは何かを学校と社会とが共有し、共に育てていくことができる好機にある」と示されている。次期学習指導要領等においては、幼児教育から高等学校までの教育を見通し、育成すべき資質・能力を系統的に示そうとしている。幼稚園だけでなく保育所・認定こども園において育成すべき資質・能力を「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で示し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が提示されてもいる。これらをいかに各園が、家庭や地域の実態を把握しつつ、幼児の姿を通して分かり易く伝えるかが問われているところである。

●京都市立みつば幼稚園・深草幼稚園の実践から考える

本事業の協力園である京都市立みつば幼稚園、深草幼稚園の実践から得るものは大きい。

第一は、答申に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「社会生活との

関わり」における「自分たちの住む地域のよさを感じ、地域が育んできた文化や生活などの豊かさに気づき、一層の親しみを感じるようになる」という姿を教員が具体的なイメージを持って捉えようとしていることである。ほんの一例だが、みつば幼稚園の特老の方とのふれあいの事例で「おじいさんの手をなでながら優しく握り、声をかける」姿、深草幼稚園で畑の K さんを「仲間やったんやー」と言う姿、七夕の短冊に「みんなの願い」を考え合う過程など、「親しみを持つ」という言葉のみで幼児の姿を説明したように思いがちなところをきめ細かく捉え、その中に潜む自分が役に立っているうれしさ、そこで得る自己肯定感や有能感の高まり、地域と自分とのつながりを感じ関わることの喜びなどが示されている。

第二に、その姿を基にして、教員が幼児の地域とのつながりを通して育つ姿を明確にし、指導計画に位置付けていることである。現行の幼稚園教育要領の総則第一「幼稚園教育の基本」に「幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるもの」という一文がある。「環境を通して行う」幼稚園教育における環境の構成の重要性を示したものであるが、今回の研究において、両協力園の教員が幼稚園生活における幼児の姿を家庭・地域といかにつなぐか、その創造していった過程にこそ価値がある。毎日、園で繰り返される遊びと違って、地域との活動は教員が長期的な見通しを持ち、活動と活動との関連性、普段の幼児の生活や遊びとの連続性を捉え、その中で意図を持って総合的に指導計画に位置付けなければならない。「地域に親しむ」感情は単発な活動で芽生えるものではない。各学年の発達段階に沿った長い見通しを持って幼児の体験を具現化する教員のイメージの広がり、その体験を通した幼児の学びの一つ一つを読み取り、その経験を絡み合わせていく力が必要であろう。

このように考えると、「社会に開かれた教育課程」は「開かれた」ものが最初からあるのではなく、社会にどう開いていくか、幼稚園・家庭・地域が一体となって絆を深めていく双方向に開いていくプロセスを創造する力が重要であり、家庭を含む地域に幼児教育の重要性が浸透し、巡り巡って幼児の「地域の一人としての感情」が根付いていく、そのプロセスそのものが「社会に開かれた教育課程」となっていくのであろう。

京都市立幼稚園には、みつば幼稚園・深草幼稚園を始めとして多くの園で学校運営協議会を立ち上げ、地域との関係を創り上げてきた実績がある。これまでの「学校運営協議会を核とした地域との連携」の基礎の上に、今後更なる深まりへの期待は大きい。上記「答申」の記述通り、幼稚園が地域と共に幼児期に育成すべき力を共通に見据え、地域の人的・物的資源を活用し、その目指すところを連携しながら実現する好機と言えよう。本事業における成果は、京都市立幼稚園が示す「地域に必要とされる幼稚園」を考える上でのカリキュラム・マネジメントの一視点として有効であろう。両協力園の実践に深く感謝申し上げる。

引用

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）

中央教育審議会 平成 28 年 12 月 21 日

子供が地域へ開かれていく教育プロセスを生み出す

京都教育大学教育学部幼児教育科 准教授

古賀 松香

1. 幼児のまなざしが開かれる

「家庭や地域の教育力低下」が叫ばれるようになって久しい。家庭の教育力の低下については、核家族化により子育ての伝承がなくなってきたことや、保護者世代の人とかかわる力の低下等、さまざまに原因は指摘されている。一方の地域の教育力の低下については、地域とのかかわりの希薄化が原因と言われることはあっても、地域に住む人のもつ教育力が低下しているとは言われない。そこで求められているのは、地域と子供がかかわる日常の復活であり、そのための新たなかたちである。

今回の研究は、地域と幼児のかかわりを生み、幼児自身に地域の人との日常的なつながりが感じられるように育むという難題に取り組んだ、意欲的な試みであった。京都市は公立幼稚園が学校運営協議会を早くから立ち上げ、地域の力を取り込んだ教育のあり方をつくってきた地域である。もともと京都には地蔵盆といった行事に代表されるように、地域が子供を大切に見守り育む文化が息づいており、また、番組小学校を地域で創設した歴史をもつ、教育への思いが篤い地域でもある。そういった地域でもなお、マンション居住世帯が増加し、保護者が地域とかかわりをもつ時間や機会をもたないまま過ごすようになってきている。子供たちに対してあたたかいまなざしをもつ地域と子供をつなぐ役割を担うのは、家庭ではなく幼稚園などの幼児教育機関に移行しているのである。

では、今回の研究はこれまでの京都市公立幼稚園の取り組みと何が異なっていたのか。それは、幼児自身が地域の人に対して「日常的な親しみ」を感じられるように育むということに強く意識を置いて教育実践を行ったことであろう。幼児は、具体的な経験を通してさまざまなことを学んでいく。また、幼児は身の回りにある様々なことに自らかかわっていくものであるが、それは何に対してもそうであるのではない。人間は赤ちゃんの頃から、自分がどう行動するか迷うとき、自分の大好きな大人の表情や反応をうかがって行動する。地域で保護者が挨拶することがなければ、子供も挨拶することがないまま育つ。地域と子供がかかわる日常を復活させるためには、教育機関が意識的にその間をつなぐ役割を担っていくことが必要なのである。

子供は、自分が親しく思い、自分の身になって意図を理解してくれる人（YOU 的存在）のまなざしを通して、外の世界を知っていくと言う（佐伯, 2007）。佐伯はこれを「発達のドーナツ論」と呼んでいるが、今回の研究で挑戦した課題というのは、子供を取り巻く第1のドーナツの輪（家庭）が地域とかかわりを持たなくなってきた現在、図1の家庭

が担っていた機能を、図 2 のように教師や幼稚園が担い、地域へのまなざしを子供の中に育もうということであったと整理される。なお、図中の矢印は、子供が地域に向けるまなざしとして理解してほしい。子供が家庭または教師・幼稚園のもつまなざしを通して、自らもまなざしを向けて地域を知っていくということを意味している。

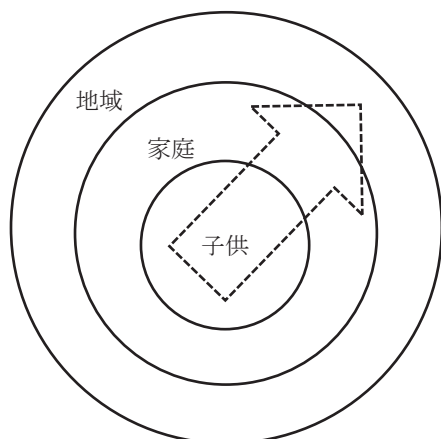


図.1 子供・家庭・地域の関連図

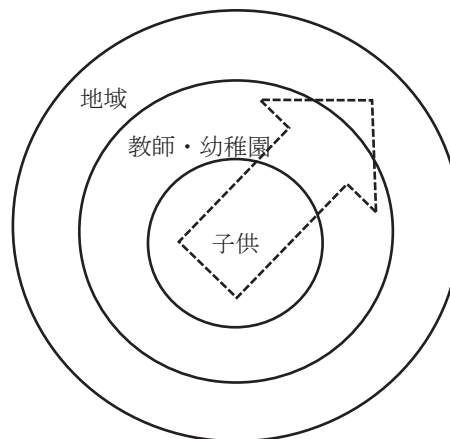


図.2 子供・園・地域の関連図

この取り組みが実際に機能することによって、本研究で見られた動きは図 3 のようになると考えられる。子供が、教師や幼稚園を媒介として地域の人と関わるようになったこと、またそれが一方的かかわりや単発的かかわりでなく、相互の継続的なかかわりをもっていったことにより、地域の人が一層子供たちへの思いを強く持ち、また子供たちも日常的な親しさを感じるようになっていった。「地域の人」という非常に大きく多様性に富んだ枠の中から、「地域の親しい大人」という新たな枠組みが生じ、子供が親しく思う理解者の輪である第 1 のドーナツの輪に入ってきた。つまり、子供を取り巻く輪が多層的になってきたと捉えられるのである。

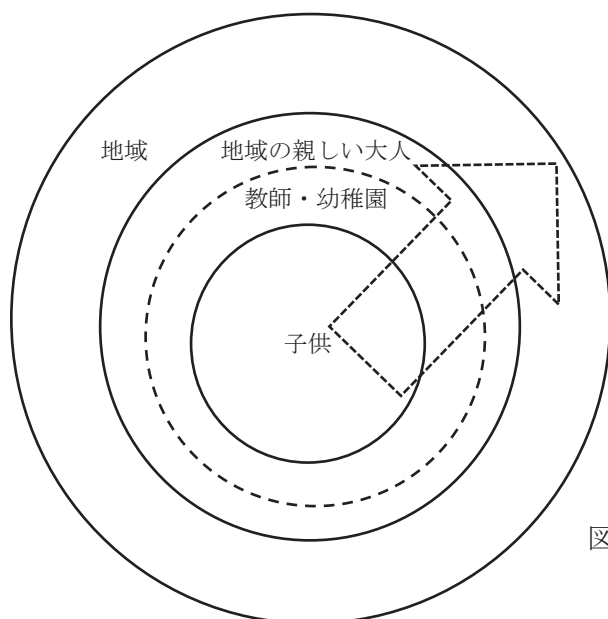


図 3. 第二の輪の多層化

このことは、これからの社会を生き抜いていく子供たちの人生を支える大きな力となる。地域の大人たちは、保護者や教師とはまた異なる人生経験を持ち、価値観を持ち、愛情をもって子供たちに接してくれる。子供はさまざまな人に愛情をもって囲まれたとき、自分の生きる価値や楽しみをより一層感じ、ひろがりをもって生きていくことができるようになるであろう。

2. 媒介となる教師・幼稚園に求められる専門性

子供は常に「今日の前にあること」に関心を向ける性質があると同時に、忘れっぽい性質も併せ持っている。地域の人とのかかわりは、今日の前にあるときには充実して楽しめるが、数か月後に行われる行事で再開した時にはまた新しく出会う人のように忘れていたのが子供である。「日常的な」親しみが感じられるようにするには、教師が意識をして子供の経験と経験の間をつないでいかななくてはならない。またそのつなぎ方が大人の押しつけであってはならない。子供にとって意味が感じられたときに、教師の経験をつなぐ援助に価値が生まれるのである。

本研究に登場する4歳児たちは畑で野菜を育てる取り組みの中で、地域の野菜名人 K さんとかかわりを深めていく。教師は K さんがいない場で K さんの名前と写真を持ち出し、畑の話題で子供たちとやりとりしていく。また、K さんと実際に話し、活動した後は、経験を振り返ることができるように写真やコメントを入れたボードを作成し、朝登園した子供たちが身支度をしているときに、一緒にボードを見ながらやりとりをしていく。子供たちの中に地域の K さんが息づいていくためには、教師が意識をもって「具体的な名前や写真」を、「子供たちが取り組んでいる活動」の中に「日常的に」入れ込んでいくことが重要な働きであることがわかる。これは絵本ボランティアさんとかかわりに一層親しみが持てるように、名前と顔写真を掲示した事例でも同様である。

5歳児たちは七夕の長い笹飾りができたときに、教師が用意した笹では小さいことに気付く。それは、偶然起こったように見えるが、実は教師のしかけである。子供の中に“地域の人にもっと大きな笹を頼もう”という必要感が生まれ、活動はかかわりを生む方向へと展開していく。子供たちが「自らの活動」の中で「地域の人とかかわる必要感」が感じられるように、教師が「日常の保育の中にしかけ」をつくり、「具体的な名前」を出しながら会話し、〇〇さんとの主体的なかかわりが生じる教育プロセスを生み出している。一過性のイベントではなく、先生がやらせる活動でもない、子供たちが主体的に活動する中で、必要感を感じて地域の人とかかわっていく経験が次へつながる育ちある経験なのである。

またこれらは、教師個人の取り組みでなく、園全体の教育課程の中で位置づけられた教育内容であり、それを地域の人とつくる学校運営協議会と共有し話し合いながら進められてきた。組織として園と地域が協働していくには、園長がリーダーシップを発揮して、積極的に地域の力を園の教育力の一翼として取り込んでいこうとする姿勢と実践力が必要である。そして、そのことを教育課程という園全体の教育の骨組みに位置づけ、PDCA サイ

クルを地域の人と共に好循環させていく、つまり、活動のプロセスを共につくり、振り返り、よりわかりやすい、より意味のある活動ができるような教育課程に再編していくこともまた重要である。多くの人に継続的にかかわってもらい取り組みは、それぞれの人に楽しいと感じられなければ続かない。子供たちとのかかわりが楽しく、そこに教育的に意味があることとわかり、地域で生きることの意味づけとなっていったとき、この活動はこれからも育つ活動へ展開していくであろう。宿泊保育を園内で行おうという取り組みを相談した事例では、学校運営協議会主催の夕涼み会と合同で行うことを地域の方から提案され、協働的に宿泊保育を行っている。子供たちは自園での宿泊保育の中で、地域で生きる自分、地域に役立つ自分を感じていく。こういったことは園に宿泊するだけではなかなか生じない。幼稚園が自らの教育内容と課題を地域と共有し、子供たちのためによりよいものをつくりたいと願い、その思いを伝えることで実現する地域との協働である。

本研究では実際の教育課程を学校運営協議会に開いていった。最初は理解してもらうにはほど遠い様子だったが、幼稚園の教育をわかりやすく伝えるツールとしての新たな教育課程のかたち（表現方法）を開発することで、地域の人が幼稚園教育をよりよく理解し、自分たちの活動の教育的意義を確かなものと感じ、さらに高めていこうとする動きが生まれていった。幼稚園教育は小学校以上の教育と異なり、環境を通じた教育、遊びを通じた総合的な指導という一般的にはなかなか理解されにくい方法で行われる。しかし、具体的に協働していく中で、何が幼稚園における教育なのか、具体的なイメージが生成され、その具体的なイメージが文字や写真で整理された教育課程と共に咀嚼されることで、幼稚園教育に対する一層の理解へと向かわせたのではないと思われる。

また、こういった取り組みは、子供たちにとっても地域の人にとっても、意味ある活動へと展開する中で、保護者へ伝わり、かかわりをさらに広げることにつながっていく。

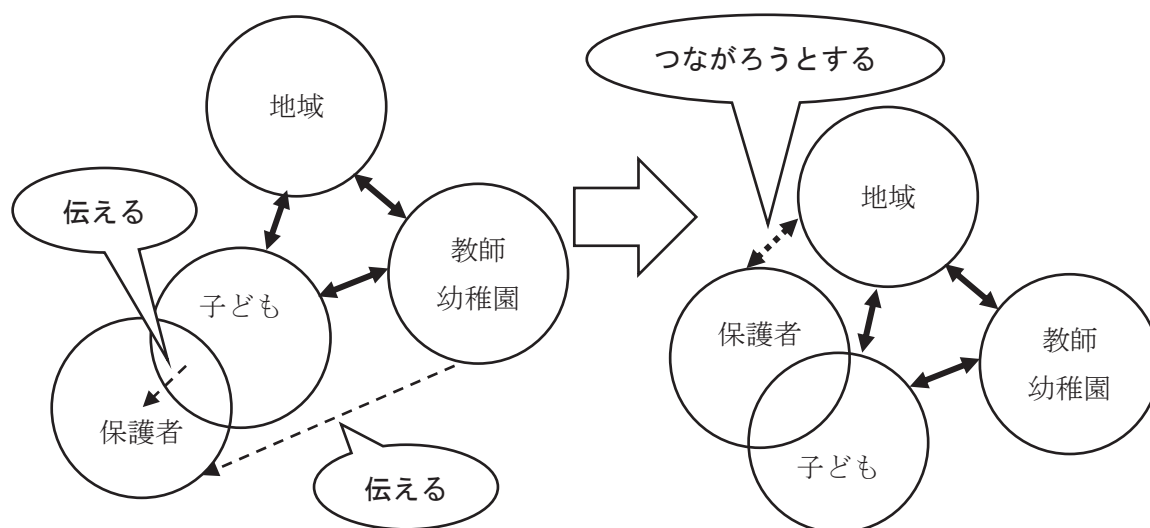


図 4. 地域から家庭へのひろがり

子供は今日の一日で印象的であったことを心の動きとともに保護者に話をするだろう。わが子が生き生きと地域の人との交流を語り、そこで学んだことを自分たちの活動に生かしている様子を知ることが、保護者の地域へ向かう気持ちを育むに違いない。個人差があり、一足飛びにはいかないが、少しずつ保護者の地域との距離を縮め、自らも関わろうとする家庭をつくっていくきっかけになるのではないだろうか。

ここに、地域との協働的関係をはぐくむ教師と幼稚園に見られた専門性をまとめておく。これを参考に地域と協働する実践を広げていってほしい。

- ・ 名前呼び合う関係をつくる
- ・ 継続的なかかわりの機会をもつ
- ・ 子供が認められ、喜ばれていることが実感できる活動を地域の人と共有する
- ・ 「地域の人が必要だ」と子供の中に必要感が生じる活動展開を生む
- ・ 活動と活動の間で、子供の中の地域の人への思いを育む
- ・ 子供の日常会話に地域の人を取り込む物的環境構成
- ・ 継続的な取り組みのための組織（学校運営協議会）と教育課程づくり
- ・ 園と地域をつなぐ園長のリーダーシップ

子供は周囲の人とのかかわりを通して、自らを知り、周囲のさまざまなことを知り、さらにかかわろうと主体的に生きるようになっていく。子供が減り、園の規模が縮小していくこれからの時代、子供が園外に単に出るだけでなく、園外の人とつながりながら多様なかかわりを経験することは大きな教育的価値がある。これから多くの園でこういった実践が一層ひろがっていくことを期待したい。

引用文献

佐伯 胖（2007） 『共感－育ち合う保育のなかで－』 ミネルヴァ書房

おわりに

平成17年度、文部科学省の委託研究時、私は中京もえぎ幼稚園で教頭として研究に携わり、学校運営協議会“もえぎティンクル”の発足にかかわらせていただきました。京都市の中心部の統合した幼稚園で、祇園祭の奥深さ、町衆の方々の心意気を身近に感じ、四季折々の京都御苑の自然に触れ、お茶会等の伝統文化が息づく地域に幼稚園があることで、幼児期にほんまもんの豊かな自然体験、社会体験を子供たちに提供することができました。何より、「子供のために、幼稚園のために」と一生懸命に関わってくださる温かい地域の方々が幼稚園の願いを支えてくださっており、まさしく「京都の文化力・人間力の偉大さ」を肌で感じる経験をさせていただきました。

地域の文化の有り様にはそれぞれ特色はありますが、京都市立幼稚園は、身近な地域の方々に愛され、支えていただき、地域との連携を教育の柱にできる恵まれた幼稚園です。本研究で、みつば幼稚園と深草幼稚園が、その地域とのかかわりを“子供の育ち”の視点で、丁寧に問い直すことで、多くのことを学ばせていただきました。子供が成長するにつれ、その生活が家庭から地域へ、そして幼稚園から地域へとさらに広がり、子供自身がそこで愛され、育まれる実感をもってこそ、自分の住む地域や人々に親しみ、愛着をもち、地域の中の自分の存在や役割を自覚していくことがわかりました。そして、保護者も子供と共に地域の方々に見守られていることを実感され、地域を自分のフィールドとして生活され、後に地域の担い手として活躍される姿を数多く見てきました。子供の元気な声が地域に溢れ、若い保護者の方々が地域で活躍される活力を地域の方々も望んでおられることを実感しています。

折しも、学習指導要領等の改訂において、「社会に開かれた教育課程」が提言され、幼稚園教育要領の改訂においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の中で「社会とのかかわり」が提唱されました。京都市立幼稚園では、従来から、当たり前のように行ってきたのですが、本研究の機会をいただき、地域とのかかわり、世代を超えた人とのかかわりが、益々希薄になる今だからこそ、より一層重要な意味を持つことがわかりました。そして、地域のかかわりでの「子供の育ち」を確かなものにするためには、地域と子供、保護者をつなぐ願いをもった教師の「子供と共に保育を創る」力量が何よりも重要であることがわかりました。地域で子供が育つための核となるべき公立幼稚園の役割を自覚し、今後も子供と創る保育を楽しみながら研鑽していきたいと思えます。

最後になりましたが、調査研究実行委員会の委員の皆さま、とりわけ、たくさんの指導・助言をいただきました名古屋学芸大学津金美智子教授、京都教育大学古賀松香准教授に心より感謝申し上げます。

平成29年3月1日

京都市教育委員会 学校指導課 首席指導主事 中西 昌子

「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究」実行委員会名簿

氏名	所属等
津金 美智子	名古屋学芸大学ヒューマンケア学部子どもケア学科 教授
古賀 松香	京都教育大学教育学部幼児教育科 准教授
橋本 憲尚	京都市立みつば幼稚園学校運営協議会 理事
相原 弘子	京都市立深草幼稚園学校運営協議会 理事
田中 順子	京都市立みつば幼稚園 園長
奈良 美保子	京都市立みつば幼稚園 教頭
佐藤 菜々子	京都市立みつば幼稚園 研究主任
奥 景子	京都市立深草幼稚園 園長
林 朋子	京都市立深草幼稚園 教頭
平田 裕紀	京都市立深草幼稚園 研究主任
佐藤 卓也	京都市教育委員会 学校指導課長
辻 昇	京都市教育委員会学校指導課 担当課長
中西 昌子	京都市教育委員会学校指導課 首席指導主事

研究同人

田中 順子	奈良 美保子	奥 景子	林 朋子
那須 宏子	佐藤 菜々子	平田 裕紀	中間 紀子
吉川 幸菜	今村 香奈	大庭 裕香	
大谷 ラナ	山本 小百合		
前田 晴香	小林 香那		

『ぼくたちわたしたちのふかくさ』



第58回京都市立幼稚園こども展より
京都市立深草幼稚園出品作品